

聖書：ヨハネの黙示録 1：4～5a

説教題：恵みと平安があなたがたに

日時：2020年11月1日（朝拝）

今日の箇所にはこの書の著者、宛先、祈りが記されています。これは通常の手紙のスタイルに沿ったものです。ここからもヨハネの黙示録は、単に将来起こることを予言する秘密の書というようなものでないことが分かります。これはある人からある人へ、という手紙の形式で書かれていることを私たちはここで心に留めたいと思います。

ではこの手紙の差出人は誰でしょうか。4節にシンプルに「ヨハネから」と書いてあります。このように記せば、あとは説明不要な人、それはあの12使徒のヨハネであったと考えられます。彼は使徒たちの中で若く、結果として最後まで生き残った人でした。しかしただ若かったから最後まで生きたわけではありません。彼の兄弟ヤコブは使徒たちの中の最初の殉教者となりました。またパウロやペテロはローマ皇帝ネロの迫害の時代に殉教しました。紀元60年代です。ですから新約聖書の多くを占めるパウロの手紙は60年代までにすべて書かれたことになります。またヨハネ以外の福音書、すなわちマタイ、マルコ、ルカの福音書は50年代から60年代にかけて書かれました。そんな中、ヨハネは1世紀の終わり頃まで生きました。彼の福音書は90年代前後に書かれ、彼の3通の手紙は90年代初め頃、そしてこのヨハネの黙示録は90年代半ばに書かれたと思われます。

また彼はただ文書を記しただけでなく、牧師としての働きをしました。特にその働きは後に出て来るエペソと関係していたようです。エペソは当時のアジア州の首都で、東地中海世界ではシリアのアンテオケ、エジプトのアレクサンドリアと並んで3大都市の一つでした。パウロは第3次伝道旅行でエペソで3年間伝道し、この地に教会が設立されました。その後、エペソ教会の牧会を担当したのは彼の愛弟子テモテでした。さらにその後、1世紀の終わり頃にかけてこの地を牧会したのがヨハネだったと考えられます。ヨハネの福音書はエペソから書いたと彼の直弟子のポリュカルポスが証言しています。またヨハネの手紙第一もエペソの教会に宛てて書かれたと言われます。そしてこのヨハネの黙示録も、この後見るように、エペソの教会と深く関わっています。

そのヨハネはどこからこの書を書いたのでしょうか。9節を見ると、「パトモスという島にいた」とあります。エペソから南西へ100 kmほどのエーゲ海に浮かぶ小さな島です。なぜ彼はそこにいたのか。それは旅行のためでも、宣教のためでもありません。一言で言えば、彼は島流しにされていました。9節に「神のことばとイエスの証しのゆえに」とあります。後にも述べますが、この時はキリスト教迫害の時代でした。ヨハネは福音を忠実に宣べ伝える歩みをしていたために流刑地のパトモス島に島流しにされていたのです。若い時から主に従い、ただ長く生きてただけでなく、年老いたこの時、——80歳は過ぎていたと思われませんが、——その年齢に至るまで、主に忠実に歩んで大きな働きをし、また多くの貴重な書を書き残した人、その人がこの使徒ヨハネでした。

次に宛先として4節に「アジアにある七つの教会へ」とあります。具体的にこの7つは、11節にあるように、「エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキア」になります。地図を参照いただくと分かりますが、パトモス島に近いのはエペソです。そこから右回りに円を描くようにたどった場合の順番でこれらの町々の名前が記されています。おそらくこの順番にこの黙示録が回覧されたものと思われます。ここで「7」という数字には注目しておく必要があります。これはこのアジア州、今日のトルコ西部には当時、教会が7つしかなかったということでしょうか。この地方には他にもコロサイ教会や、ヒエラポリスの教会があったことが、コロサイ人への手紙から伺い知れます。この「7」という数字は、この後の黙示録全体でもそうですが、象徴的な意味で使われていると考えられます。この「7」は聖書では完全数を現しています。もともとは創造の七日間に由来します。6日間の創造のわざの後、神は7日目に休んで、なさっていたわざの完成を告げられました。つまりヨハネは確かにこの7つの教会に宛ててこの書を書いたのですが、この「7」という数字において、これに象徴される全教会のことを考えていたのです。実際、このあと2章以降で7つの教会一つ一つに対するキリストのメッセージが語られますが、その締めくくりの部分では（例えば2章7節、11節、17節、29節など）「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい」と記され、「諸々の教会」「全教会」が耳を傾けるべきとされています。

当時の教会はどんな状況にあったのでしょうか。先に触れた通り、当時の教会は

迫害下にありました。ヨハネ自身、島流しにされていましたし、2章13節にはアンティパスという人の殉教が述べられています。そして特にこの書の13章14章から、皇帝礼拝が強要された時代であったことが伺われます。それはどの皇帝の時代だったのでしょうか。キリスト教迫害で有名なのは第5代皇帝のネロです。パウロやペテロは、その時代に殉教したと言われていています。しかしネロは自分を拝むようにとは人々に求めませんでした。また彼の迫害は短期間で、局所的なものでした。彼に続くキリスト教第2の迫害者は、第11代皇帝のドミティアヌスという人、紀元81年から96年に在位した暴君です。彼は自らを古代ローマの神の子とし、自らを「主にして神」と人々に呼ばせ、国民からの礼拝を求めました。これをもって自らに対する忠誠のテストとし、これに屈しないキリスト教会を迫害しました。その迫害はすでに始まっており、さらに厳しい状況が待ち受けていると思われる時代にありました。また問題は教会の外側にばかりあったわけではありません。不敬虔な世のただ中であって、教会は偽りの教えの危険にもさらされていました。2章14～15節には「バラムの教え」とか「ニコライ派の教え」といったものが出て来ます。また不道徳な歩みをする人たちがいました。神の国の価値観よりも、この世の価値観に従って生きる誘惑にさらされていました。一言で言えばこの世と妥協する生活です。ですから3章16節では「あなたは生ぬるく、熱くも冷たくもない」と言われます。時代に飲み込まれ、自己満足に陥り、この世の調子を合わせた生き方をする誘惑がありました。そんな彼らに天の視点に立って堅く信仰に立つ歩みをするように！と勧めているのがこの書です。目に見える表面的な事柄の背後には何があるのか。そこにはキリストと反キリストの戦いがあること、子羊と竜の戦いがあること、神の国とこの世の国の戦いという霊的な戦いがあることをヨハネは受けた幻を取り次いで明らかにしていきます。そして神がキリストにあって必ず導かれる最終的勝利を見据え、確信して、主の教会はどのように歩むべきか、その道を指し示しているのがこの書なのです。ですからこれは1世紀の教会だけでなく、今日の私たちにもそのまま当てはまります。これは決して終わり直前の不思議な出来事について、ただ論じるだけでの、ある人たちの好奇心を満たすためのものではないのです。

さてそんなアジアにある7つの教会、そして7に象徴される全時代の教会のために、ヨハネは恵みと平安があるように！と最初の祈りをささげます。ここでは三位一体の神が見上げられています。最初の「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」とは父なる神を指しています。これは出エジプト記3章14節で、神がモーセにご自

分の名として示された名前、「わたしは『わたしはある』という者である」という言葉を受けたものです。「わたしはある」という言葉は、他の何にもよらず、ご自分の力で存在しておられることを示すものです。一言で自立自存の神ということです。

そしてこの表現には時間に制約されずに「いつも」そうであるというニュアンスがあります。ですからここで、今だけでなく、昔もおられると言われていました。また将来についても同じです。この方こそ私たちの全歴史の上に絶対的主権を持つ真の主権者です。このこと一つを心に留めるだけでも私たちにとっては大いなる慰めではないでしょうか。今、私たちはコロナ禍のただ中にあり、これから世界はどうなるのか、様々な不安を覚えています。あるいは私たちの人生には色々なことが起こり、耐えがたい苦しみやストレスの中に置かれることがあります。しかし神は昔から今に至るまで、そして将来に至るまで、いつもそこにおられ、すべてを知り、一切を支配しておられる方です。ですからその神に私たちは心を向け、導きを求め、信頼すれば良いのです。

そして興味深いのは将来について「やがて来られる方」と言われていることです。「今おられ、昔おられ」と来たら、次は「やがておられ」が自然ではないでしょうか。しかし「やがて来られる」となっています。どうしてでしょうか。これは将来においても主権を持つ神が、この世界の歴史にやがて決定的に関わって来られるというニュアンスを示しているように思われます。世界の歴史を最終状態へ導かれるのは神です。そのために神は来る！のです。具体的にはキリストの再臨においてです。この主権者から、困難な時代を乗り越えるための恵みと平安があるように！とヨハネは祈っています。

2つ目は「その御座の前におられる七つの御霊から」。ここを読んで私たちは御霊は一つではないのか。7つとはどういうことかと頭が混乱しそうになりますが、「7」という数字は先に見た通り、象徴的な意味を持っています。先ほど完全数を意味すると申しました。ですからこれは御霊の完全な働き、十分な働きを指していると思われれます。そして先に出て来たばかりの「7つの教会」の「7」に関連していると見るのが適切ではないでしょうか。12節以降に「7つの金の燭台」という言葉が出て来ます。それは前の節の7つの教会を受けていて、教会を指すイメージとして使われています。すなわち教会は世にあって燭台のようにキリストの光、福音の光を輝

かせる場所であると。そして後の4章5節では「御座の前にある7つのともしび」のことが語られ、それは「神の7つの御霊である」と言われます。つまり燭台としての教会を輝かせるのは御霊の働きによるということでしょう。キリストから恵みを受け取って教会に当てはめ、教会がキリストの光を輝かせることができるように、御座から遣わされて豊かに働いてくださるのが御霊です。その御霊の完全な働きに信頼して、恵みと平安を豊かに注がれて生きる教会であるように！とヨハネは祈っていると考えられます。

そして三つ目は「イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにあるように」。このイエス・キリストについては3つのことが語られています。明らかにキリストに強調点が置かれています。黙示録全体を通してそうです。まずキリストのことが第一に「確かな証人」と言われています。第3版までは「忠実な証人」と訳されていました。ここにまずキリスト自身が忠実に証しをされた方と言っています。キリストはこの世に下って来て、神とその救いについて証しされました。そしてヨハネが特にここで考えていたのは、イエス様が十字架を前にしても、支配者たちの前で、立派に証しされた姿でしょう。テモテへの手紙第1章13節：「ポンティオ・ピラトに対してすばらしい告白をもって証しをされたキリスト・イエスの御前で・・・」。この黙示録が書かれた時代の信者たちは、迫害の中で妥協し、忠実な証しをしない誘惑の中にありました。そこでヨハネはイエス様ご自身が忠実に証しされた姿を思い起こさせているのです。その姿に励まされて、自らもまた忠実な証し人になるようにと。

第二に「死者の中から最初に生まれた方」とあります。キリストは忠実な証しをしたがゆえに十字架につけられ、殺されましたが、それで終わりではありませんでした。その方は死者の中から復活されました。キリストが十字架にかけられた時は、敵が勝ったように見えました。キリストご自身の歩みは敗北に終わったように見えました。しかしキリストは復活によって永遠の勝利を得て、新しいのちに最初に生まれた方となりました。「最初に」とあるのは、第二、第三があるということです。つまりキリストに倣う者たちも、死を乗り越えた新しいのちに生かされるということです。1章18節：「わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。」このキリストを見上げて、従う祝福に生きるようにとヨハネはこのことを語っています。

そして第三に「地の王たちの支配者」とあります。イエス様はよみがえって、すべての権威の上に高く上げられ、宇宙の王とされました。ここで特に考えられているのは、先に触れた当時のローマ皇帝ドミティアヌスのことです。彼は王としての権力をほしいままにして、逆らう者たちを残酷に扱いました。しかし彼がこの世界で一番の主権を持っているのではない。「主にして神」とは彼ではない。キリストこそ地の王たちの支配者、王の王です。いくら地上の王が何かをしても、この方に逆らうことはできません。究極的に彼らは神のご計画に仕えさせられるだけです。5章13節：「また私は、天と地と地の下と海にいるすべての造られたもの、それらの中にあるすべてのものがこう言うのを聞いた。『御座に着いておられる方と子羊に、賛美と誉れと栄光と力が世々限りなくあるように。』」このキリストから恵みと平安を！とヨハネは祈ったのです。

これは今日の私たちも等しく当てはまるものでしょう。私たちも根本的には同じ戦いの中にあります。ローマ皇帝による迫害に似たものはないかもしれませんが、この世の権力をもって何かとプレッシャーをかけて来る動きはいつでも私たちの上に臨み得ます。またそれ以上に、困難の多いこの世でうまくやり過ごそうとして妥協しようとする誘惑は常に私たちにもあるのではないのでしょうか。教理的な面からも、道徳的な面からも、この世と調子を合わせ、この世の圧力に巻け、適当なところで折り合いをつけて自己満足し、光を放つこともなく、忠実に証しすることもしない。そうして実はその背後にある悪魔の策略にまんまと引っ掛かり、むしろそちらの動きに加担する一味とさえ化してしまっている。そんな私たちもこの黙示録を通して天の視点をいただき、神の目でこの世と私たちの姿を見つめて行くべき道を行く者とされたいと思います。今日の箇所から私たちが仰ぐべきは、神こそ昔も今もこれからもすべての上にいます絶対的主権者であるということです。また聖霊こそ私たちの光を輝かせてくださる完全で十分な助け手であるということです。そしてイエス・キリストこそ私たちがならうべき忠実な証人であり、死者から最初に生まれた方、また今やすべての王たちの支配者であるということです。この力強い三位一体の神を見失って、世の価値観で生き、世に埋没してしまう者となりませんように。三位一体の神から恵みと平安を日々祈り求めて、神がキリストにあって導き入れてくださる神の国の最終的勝利、最終的完成に向かっていよいよ希望を大きくし、福音の光を輝かせて神とともに歩む教会の幸いへ導かれて行きたいと思います。